
虚史

田中 平八

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚史

【Nコード】

N8257P

【作者名】

田中 平八

【あらすじ】

時は戦国。少年達は時代から生まれる波に飲み込まれる。

この国には侍・忍者・陰陽師・各国大名達が様々な陣営に分かれ己の正義のために戦う。

出会いと別れが少年達を成長させる。ある者は人々を導く先導者に、そしてある者は、人外の路に溺れて破滅者に……この物語はそんな歴史の一片である。

〔龍賀谷山賊殺人事件〕

序の幕（前書き）

初投稿です。字はあつてと思いますが、間違つてたら教えてください。造語はほとんどありませんので、聞いたことの無い単語が出てきたら多分間違いです。

全然読まなくてもいいので、感想をよろしくお願いします。あ、出来たら全部呼んでください。

『龍賀谷山賊殺人事件』

序の幕

【0】 虚ろな夢

「何？おい、何故だ。何故こんな事に」

男の周りには死体が転がっている。男と同じようなみすばらしいが、動きやすそうな獣の毛皮を羽織っている。

といっても、その毛皮は本来の色の面影が無いほど紅く……つまり。血塗られていた。

勿論この惨状を見て、そんな呑気に死体ではなく衣に意識が行く人間はいないだろうが……。

男は「何故だ？」とは言ったが、自分の仲間が何故次々と倒れているのかを考えている訳ではない。

いつ殺されてもおかしくないこの戦国時代に人が人を殺す理由などいくらでもある。いや、そもそも理由などなくても殺す。俺たちだってそうしてきた。だから「なぜか」ではなく「どうやって」だ。それもそのはず。男の周りには仲間達が……いや、仲間達だったバラバラ死体が転がっているからである。

といっても男が考えても分かるはずはないのである。

その理由は後で分かる事なので置いておくとして、兎に角その男は、そこらに転がっている死体と同様に殺される。バラバラにある。

実はその男達は、山賊としてここいらではかなり有名な「山椒魚」と呼ばれている集団であり、この事件だけを見れば彼らを殺したのはこの時代は少なくなかった義賊の可能性もあった。そう、この事件だけを見れば。

そう念を押すのはこの他にも最近では物騒な殺人事件が多くなってきたおり、彼らに共通点は見られていない。その中でも現在注目

されているのが、『竜崎 重松』の殺害であった。

今は、いつ終わるかもわからぬ戦国時代。狂った殺人鬼であるこのような侍が隆一たちがいる龍賀谷にも来たとしてもおかしくは無い程危険な世の中なのである。

【1】 在る兄弟

「うっご」と男は声を上げて起きる男がいた。「男」とはいつても年はおよそ18ぐらいの青年である。

無論、正常なそれぐらいの年齢の男はそんな声とも、ただの音ともとれる「うっご」などという奇妙な言葉を発声して起きたりはない。ならば彼は異常なのだろうか？ 実はそんな訳ではない。

正しい判断が出来るように、話は3分前に戻る。

「ザクザクツ」と野菜を切りながら、隆一は顔をしかめる。

弟が朝食が出来る頃だというのに、起きてこないのです。

隆一は「起きろー啓太」と呼びに行く。

そして隆一はイラついていたため、その一分後更に「啓太！！」と言う。「これで起きないと蹴りを入れるぞ」、という意味を含んだ軽く怒り気味な言葉を隆一は弟に言い放つ。そして更に1分50秒後に隆一は啓太の寝室に「おーい。まだ寝てたら蹴っちゃうぞー。」と言いながら入ったのだった。まあ、隆一の心境としては当然の成り行きなのである。

弟の啓太は極最近まで旅行に行っていた。にもかかわらず、帰ってきて自分が飯を作ったというのに。何度も起こしたというのに、なかなか起きて来なかったのだ。

隆一は『人間とはこうあるべきだ』という考えをある程度持っていたため、このような弟の『だらしなさ』を見るといつもイライ

ラするのだった。

その後数分たち、近くの定食屋で二人は幼馴染の誠二郎と一緒に朝食。

「どうした？ 啓太。」と、一緒に食べていた二人の幼馴染の誠二郎はいつもの比でわなくダルそうにしている啓太に箸で指して尋ねる。

「別に。」啓太はめんどくさそうに答える。答えた後ようやく箸を持つ。

「いやな、こいつが全然起きひんから、蹴って起こしてん。」と隆一は答える。啓太は兄を軽く睨むが自分が悪いのでそれだけにした。

「鬼畜か」誠二郎は冗談っぽく味噌汁を飲みながら答える。

梅雨の時期が近いのため、外は雲行きが怪しくなっている。もうすぐ一雨来るかもしれない。

暫く経ち、雨が少し降り始める。

「そういやあ知ってるか？ 一昨日笑えることが起きたんだぜ。」三人が朝食を食べ終わった後、誠二郎は思いついたように尋ねる。

「また汚職の陰のある悪徳大名が殺害されたっていう事件か？」などと隆一は言おうとしたが、その前に弟の「どうした、真治が殺されたのか？」というせりふに遮られた。啓太はやっぱりめんどくさそうに答える。啓太は朝にはかなり弱い。

「そうそう。真治が職場からの帰り道でブサーっと・・・ってイヤ、それは笑えなさ過ぎだろ！！」誠二郎は立ち上がって突っ込みを入れる。このころでは珍しい乗り突っ込みである。

「じゃあ留美さんにでも振られたか？」誠二郎に乗り突っ込みをさせるために、兄は言う。留美さんとは、誠二郎の彼女である。

「そうそう。一昨日に彼女に振られてな・・・っておいたといえ振られたとしてもそれは笑えないだろ！！」と突っ込む。二回目もしっかりとこなした。が、「たえ」という言葉を隆一は聞き逃さなかった。

「何が原因だったんだ？」と隆一は幼馴染に鎌を掛ける。すると、「イヤ振られてないて。」と誠二郎がいう。するとここぞとばかりに隆一が「やっぱり振られたのか！！」と言う。

啓太が興味心身に聞いている。が、誠二郎がごまかす。そして、隆一がちょっかいを掛ける。といった、やりあいが続く。

何人かが店に入ってくる。いまはもう九時ごろで雨も少し降ってきた。

「で、冗談はさておき」冗談で済ませる以上には話したが・・・と考えながら、隆一は少し間をおきながら「なんねんや笑えることって？お前の言うことやからまったく笑われへん事ねんやろ」静かに訊く。

啓太は面白い話題が終わったので、まためんどくさそうにして聞いている。

ここで話は、冒頭に戻るわけである。

「一体その犯人はいつたいどうやってころしたんだろうな」と誠二郎が話した昨夜の事件を聞いてから啓太は答える。

「現場を見ればわかることも有るかもやけどなあー」と啓太はそんなことが無理なことを分かっていながら呟く。

しかしまあーこいつは何で一昨日に起きた事件をここまで正確に役人がしたと思われる義賊という間違った答えまで知ってるんだろ。っつーかこいつの耳の早さを俺はまだ過小評価していたって感じだよな。まさかここまでちゃんと俺が情報規制までしている事まで知ってるんだ。これはまた部下に説教する必要が有るな。と、隆

一は考える。

「ああ、知ってた」そもそも情報規制ごと俺が担当してるんだと続ける。彼は、捜査現場監督という役職だった。

「そうだったのか。いやぁー知らなかったなー」と誠二郎は驚いたように言う。

白々しい・・・隆一はそんな思いを隠しながら事件を隠していたことを弟に文句を言われているのを面倒くさそうに、団子を食べている。基本この兄弟はONとOFFの差が大きい。

三人は事件現場に行く。現場の総監督をしている隆一がいるので事件現場にはこれる。しかし事件現場に来ても事件の証拠を見れるようなことはなかった。べつに隆一の権限の限界・・・というのではなく、雨で現場がグチョグチョになっているのである。

「どうする？」隆一は二人に尋ねる。梅雨の時期やからなあまあこうなるよな。と締めくくる。弟が愚痴っているのは無視する。

「最近をよく降るよな。一昨日も雨やったよな。」啓太は曇天を見上げながら。誰にということもなく呟く。

「事件当日も雨だった・・・」そんな分かりきっている言葉を何度何度も隆一の頭の中に響いた。そして事件の真相について自分が抱いている不可解な点について調査を進めることを決心した。

3人が事件現場を過ぎ去った後風も無く木が揺れた。

【2】 捜査官嬢駕崎 真治の回想

「事件の犯人について何か分かったことはあるか？」と胸糞悪い愚図の今回の山賊殺害事件の総監督をしている、隆一殿がこの俺、真治様にいつもどうりのいけすかねー無表情で聞いてきた。だから

俺は「イヤ全く判りません。」と答え、申し訳なさそうに「それに今回の事件の動機も殺人方法もわかっておりませんから犯人の目星さえも……」と答えた。

ウゼエ……直属の上司で今までもこれからもずっとこいつの下に着いているが、一向になれない。慣れたくもない。今回に限っては関係のない事件まで捜査させられている。面倒だ。

しかも今は瓦版の天気予報を掲載されている。気象関係の情報を収集している天所あまのしころツーところで事件当日の気象について調べさせられている。俺はいつから雑務まで担当になったのだろう。うーんよく判らん。

補足説明

彼が調査したのは、まず事件現場の近くに住んでいる、人からの聞きまわり。

次に最近殺され続けている、龍賀谷で大手を振って生活している大名共の殺害事件やら俺らと同じ役人……といっても役職は経理部やら物流部やら彼には何の関係性もない別々の事件であった。

そして、最後に気象部。である。彼は自分が無駄なことをしているように思えてならない。

場所は変わって城之崎大名宅。ここでは大名とその側近二名、そして二名の頭を下けている侍が二人。

「お時間をおとらせて申し訳ありません。3大大名城之崎様。」そう言った二人のうち位の高そうな男は深々と頭を下げているので顔は見えない。もうひとりも

「よい。」少し間をおき「で、今貴様が担当しておる殺人件はどうなっておる？隆一……」大名が言う。

「は、そ、それが・・・ですね大名様。実は・・・」部下がしどろもどろしているため上司である隆一が「はい。八割方わかっております。」とフォローする。

「ほう・・・。」と大名。真治は驚いたように上司を見る「俺は何も聞かされていない」と大名の前で発言権が無いので話せないが、もし話せたらきつとそう言っていたらう。

「ではまずこれを見てください。」と言って真治がまとめた捜査資料の巻物を袋から取り出し隆一は見せる。「別に事件が解決できないからと言って別の事件を捜査していることを知らせなくても・・・。」と真治は思ったがやっぱり言うことはしない。というか出来ない。

「これはなんだ。」と大名。

「こ、これは雨天時に起きたご五月頃からの殺人事件です。」真治は緊張しているためしどろもどろしている。彼はすぐ緊張して、どもる。

「その割には少ないな」と大名6月になってからは雨なんて梅雨の時期なのでよく降る。

「あ。」と言い忘れた事を思い出す。「イヤ、言い忘れたんですけれどもあのですねえ雨という条件以外でもですね。気温が異常に下がった事件をピックアップしたのです」真治は今度は、どもりはしなかったものの、無駄な言葉を連呼してしまっている。

「こいつラ・・・犯人の目星が付いているのか・・・？」薄ら笑いを浮かべながら城之崎は内心呟いた。

次回 虚史
多分書きます。

〔龍賀谷山賊殺人事件〕

終章

お楽しみに。

〔龍賀谷山賊殺人事件〕

序の幕（後書き）

一応侍と忍者を戦わせるつもりでしたが、そこまで持っていけませんでした。単純に能力不足です。

次の話では一応戦わします。

〔龍賀谷山賊殺人事件〕 終章（前書き）

二回目の投稿です。前回では無理だった戦闘シーンを加工としましたがやっぱり無理でした。・・・無念。

「龍賀谷山賊殺人事件」 終章

【1】 隆一の回顧

「龍賀谷山賊殺人事件」から5日たった。

隆一は町で最近おきた山賊が殺された事件を追っていた。事件から2日たった雨の降った後隆一は、捜査方針を決めた。その捜査方針は数少ない事件の証拠から隆一が判断した結果を全てとした前提で捜査するという、根拠はあまり無い無謀とも思える捜査だった。

まず、山賊たちは殺された後バラバラにされた訳ではない。という条件これは、隆一の部下の真治という捜査官が近くの村人がバラバラ死体を見つけた時に死臭が臭わなかった。という事実からだ。

そしてそれは同時に、快樂殺人者が犯行を行ったという可能性をも消していた。なぜならば、快樂殺人者ならば近くの村人をも皆殺しにしているからだ。だから、快樂殺人者ではない。そう判断した。

この二つから・・・これしか判らなかったのでどう頑張ってもこれからしか判断できないのである。で、だ。これらから、犯人は理由も無く快樂殺人者で自分の殺した山賊を殺しただけでは飽き足らず、バラバラにした。のではなく、理由があり山賊を殺した。そしてその理由のためには、最適な殺人方法をとった。

ならば、なぜ・・・と言うかどんな理由があったのか。・・・流石に隆一には判らない。親が悪人に殺された。そして、正義に目覚めた彼は・・・という役人の考えそうな馬鹿なことを真治は言っていた。絶対に違う。動機はわからなくなった。

次は犯人だ。バラバラになっている。まるで日本刀に切り裂かれ

たように・・・この田舎町にはそんな魔法のような剣技・奥義・秘儀を使えるような剣士はいない。いたら別所に移っている。ならば村の外から・・・と考えた。が、真治が言うには不審者はいない。こんなことが出来るのは侍だと侍の俺は考えたが、傲慢な俺らが有名でもない田舎で目立たずに居れるか？答えは簡単。不可能だ。

ならば忍びはどうだ？忍者ならば人目に付かないのは当たり前だし、あんなことも忍術を使えば可能だ。うーん・・・可能か？こっちも判らなくなった。

隆一は忍者が詳しくは判らないが、理由がありあんな殺しをした。具体的に言う「見せしめ」・「目立つ」・「話題作り」こうまとめた。

これだけだ。何もわかっていない。しかし、ここで引き下がる隆一ではない。別の調査を始めた。別の観点からの。と言っても、ただの聞き込みで、それは真治に全て任せた。今回は迷宮入りかもしれない。

最近同じように殺人事件を捜査することを主に仕事としている友人が何人も何件も迷宮入りしている。俺にもとうとう恥をかく時が着たのか・・・そう思った。

しかし、光明が見えた。事件から二日後朝食を食べ終わった後に三人で事件現場に来たときだ

雨の日に起きた事件を真治に調べさせた。真治がごねるので殺人事件だけでいいといった。事件から四日たった。田舎とはいえ結構大きな都である。役所では一番多かった。28件合った。全てあわすと300件ぐらいだった。なんでも暇なヤツを合わせて30人ほど集めて調べたらしい。人望の厚い真治に任せてよかった。そう思った。

より事件と条件を合わせるために何か無いかと真治に聞くと調査

資料を見せられた。すると山賊が殺された日は以上に気温が下がった。という証言を見つけた。ほかの証言と違い、二人の人間がそう証言していた。

ヒットした。条件にあった殺人事件は全て鋭利な刃物で切り裂かれたような死に方をしていた。偶然かもしれない。しかし、一人の大名の名前が浮かんた城之崎大名だった。

以上が裏の前の話である。ほとんど真治が一人で捜査したのだが、当の本人はそんな自覚は無い。

時は事件から五日たった。まだ、隆一本人でさえ、城之崎が本当に犯人なのかどうかは、いまいち自信が無い。しかし、これ以上捜査が進まないのでは、また役人が殺される。城之崎に不正を抱いた役人が、ほかの大名が……。俺が何とかしなければ、馬鹿にされた仲間たちのためにも。使命感である。

ここから物語りは、序章の最後続くのである。

【2】 傲慢の豚

「で犯人は誰なのじゃ？」城之崎は捜査官二人に聞く。もしかしたらあてづっぽうで来たのかもしれない。城之崎は彼らの操作方法を知らない。そしてまさか忍びの情報が、もれるわけが無いという絶対の安心からの行動である。もちろん忍びの情報は漏れたわけで

はない。隆一の思い込みとも言える捜査で判ったことである。

「名前はわかりませんが、おそらく忍者です。」無表情で隆一は言う。

「ほう。」と城之崎。これぐらいなら、噂として出てきたことぐらひはある。この程度で焦るような大名ではない。しかしそれだけではなんとも言えんなあそれだけで八割か？と続ける。

「一応忍者が使った忍術は氷結系の忍術だと思います。」誇ったように言う。ように、である。実際は誇ってはいない。命の危険性を感じ始めている。

「ん？」流石の城之崎も焦り始める。こいつ・・・屋敷から出たらあいつに殺させなければ。一番に私に教えたことが正解だったな。俺にとって、だが。

「そして、これらの被害者は全て一人の城之崎に不正を抱いた役人達のなです。」隆一が決死の覚悟で、『もしかしたら諦めてくれるかも』という気持ちを込めて言う。しかしそれは只の戦慄の瞬間にしかならなかった。

何の合図も無く護衛の侍二人が、捜査官に斬りかかる。合図といえば彼らの主である『大名様』が後ろに下がったことぐらいか。といてもこんな時に合図なんかしていれば、城之崎は取り押さえられていただろう。そして大名を護衛するだけあって、とっさに行動できる。

といっても、隆一にとっては想定内である。袋から十手を二つ取り出す（日本刀を持ち込む事は始めから諦めていた）。ひとつを真治に投げ、もう一つは自分で持ち護衛との剣と十手との打ち合いを始める。

すかさず隆一の前に真治が立ち、一人目の一太刀を十手で防ぐ。そして真治は左下側に十手を日本刀ごと下ろして柄で相手の顔面を殴る。

しかしそれは空振りに終わり、代わりに別の侍が斬りかかる。

暫く真治は二人の斬激を十手で防ぐが、そればかりでは真治の腕が痺れるだけだ。

この状況を看破するには、日本刀より攻撃範囲の狭い、日本刀では間合いを詰めなければならぬ。

しかし二人の攻撃をくらいながらではなかなか間合いに踏み込めない。

無闇に踏み込めばその先は『死』だ。

その間隆一は後ろでじっと突っ立っていた訳ではない。彼は逃げた城之崎を追いかけて、またその先で護衛の侍と戦っていた。

隆一も真治も十手術を心得ているが、やはり、侍なので日本刀で相手を切り殺すことに特化した剣術のほうが、得意なので分が悪い。二人とも敵地のど真ん中。お互いにお互いを助けられる状況ではない。

それに相手が大名であるだけにぞろぞろと護衛を連れて行くことも出来なかった。

真治はとりあえず、二人からの連続攻撃から逃れるために廊下に出る。流石にでかいこの屋敷も廊下まではそこまで広くは無い。

言うまでも無く、真治も早々に廊下に出たかった。さっさと出れば、真治の腕は痺れるほどではなかったであろう。

しかし今の今まで部屋で戦っていたのは、上司である隆一が城之崎を捕まえる時間稼ぎをするためだ。

他にもこの屋敷の中には護衛の侍はいるはずだが、この二人ほど強い侍は居ないであろう。

仮にも会談で唯一入室をしていた侍たちなのだから。おそらくこの屋敷の中では一番強いだろう。

勿論それは、『侍』の中では……ということだが。

この屋敷の中で一番強いのはこの事件の当事者である『忍者』であろうから。

廊下に出た真治はまず一人目の侍から片付けようとする。

先ほどまでは真治が只の時間稼ぎのために自分達と戦っていた事を瞬時に理解した彼らは、あえて大降りの隙があるが衝撃の大きい攻撃ばかりをしていた。真治を誘っているかのように。

この攻撃を選んだのは彼らの自分自身の過信とも思えたが、結果的には自分の役割をまっとうする事を最優先に考え、行動していた真治に対する対応としては最良の攻撃だった。

しかしだからといって、真治が相手の隙を突かなかった事が『悪い』という訳ではない。

二人の連激云々以前になかなかの手馴れの侍相手に、完璧に使いこなせているとは言いがたい十手術で挑むというのは非常に不利だし、地の利もそこそこ広い部屋であれば無効に軍配が上がる。

お互いに最善の策ではあった。

だが、それは広間での話し。今彼等が戦っている場所は部屋と部屋をつなぐ『廊下』という空間。

日本刀よりも攻撃範囲の狭かった十手の方が地の利では勝っているし、一番の問題であった二人がかりの連激はもう無いと考えてよい。

真治でなくとも顔が綻ぶ。『これで実力の差を考えても五分五分だ』と考えてしまう。

その表情を見るまでも無く、真治の前に立っている侍も先ほどよりは不利になっていいる事を理解している。しかし、彼らは自らの勝利を確信していた。

なぜならば、先ほどまでの攻撃で真治はかなり体に負担がかかっているであろう事を彼らは理解しているからだ。

お互いに正気を確認しあった後侍の方が真治に左上に振り上げてから一気に真治の首から左足にかけて振り下ろす。

真治は十手でそれを受け流し、振り下ろされた刀の動きを鰐を押さえ込む事でとめようとする。

しかし侍は狭い廊下で後ろに下げた右足を軸に回転し、瞬時に真治の右側から後ろに回りこむ。

そしてまた斬りかかる。真治はそれを前方に走り出す事で避ける。しかし、そこにはもう一人の侍が剣を構えていた。挟み撃ちである。

狭い廊下でさえ真治は挟み込まれた。

その今真治と向かい合っている侍は片手で剣を持ち真治の『心の臓』を狙って突きをする。

まっすぐに伸びてくるその刀を前に真治は柄の下を握っていた右手で十手の先を握り、刀の真治から見た右側面を力ずくで押して急所を外す。

しかし真治は走っていたため踏み込みが弱く、逆に侍に押し負けて右側にこけかける。

真治はその右足で床を後ろ向きに蹴り左足で屋敷の壁を蹴り、全体重で日本刀を壁に押し付ける。

その侍は直ぐに両手で日本刀を握り真治に斬りかかる。真治としては後ろに下がって避けたいところだが、後ろの侍に体を真つ二つにされるのが目に見えているため、勝負に出る。

侍の右側に右足を置き、右腕で侍の右腕を手を逆手にして掴み、十手で首の右側を殴る。この時にこの侍は気絶する。

その後そのまま右足を軸足にして倒す。

そして完全に体の重心を失った侍の背中を蹴り刀を振り下ろそうとしている侍にぶつける。

真治がその二人に体当たりをする事で二人共々倒す。

最後に一番下にいる侍の頭を十手で殴り気絶させる。

【3】 絶対凍土

「っうー。死ぬかと思った」と真治。

「カタッ」と音が鳴る。

真治が十手を落としたのだ。これは安心したからではなく、単に

握力がなくなったからだ。

ふらふらになりながらも真治は「これで一仕事終えたつもりになってたらやっぱり僕はおこられるんですかねえ？」とつぶやく。

そして二人の日本刀を溜息を掴みながら大きくつく。

場所は戻って隆一と城之崎の護衛とのちゃんばらは佳境を迎えようとしていた。

隆一に斬りかかる侍が疲労し、剣に掛かる力が弱まったのだった。ここぞとばかりに剣を十手で振り払い右手を十手から離し相手の顔を殴る。その衝撃で、相手の侍は鼻の骨が折れる。しかしそれだけではなかった。殴られた侍は壁に頭を打ちつけ脳震盪を起こして気絶した。

「真治！」行くぞ！と声を掛けようとするが、城之崎の護衛の足止めをさしていた事を今更ながら思い出す。真治に先に行ったことを伝えるべきだが、死んでいる可能性もあるので気にせず走った。

兄とその部下が死線を繰り広げているうちに啓太はのんきに昼寝をしていた。……訳ではない。逃げるであろう城之崎大名をひっ捕まえようと二人の日本刀を袋に入れて、3本背負って来ている。すごく重たそうにしている。そんな時に笛を咥えた城之崎が飛んで出てきた。

「おい、城之崎！もう終わりだ。」勝ち誇った人がよく言うような台詞を啓太は言う。といってもまだ何もしていないのだが。

「何がだ！」息が荒れていたのでニヤンスが普通の話し口調になったので、まるで啓太の方が——というように聞こえたようだった。

「え？いや、お前の政治活動的な何かがだよ。」補足説明をした。隆一が、である。

なんとか隆一も合流できたのだ。

兎に角啓太の言いたかったことを理解した城之崎は、ニヤリと笑

い仁王立ちをした。まるで誰かを待っているように。

啓太が持ってきた袋の中から捕縛するための縄を掴む。そしてその瞬間大名の屋敷の屋根から何か黒いものが下りてくる。

啓太は警戒して後ろに下がる。するとその隙に城之崎は逃げてしまう。

「っあ！おい、待て」啓太は啞然としながらもそう言うが先程落ちてきた『黒い何か』が啓太に向かって飛んでくる。

「つくう」啓太は縄から手を離し、両手で握りなおした日本刀でそれを防ぐ。

そうしているうちに「啓太！その忍者からいったん離れろ。死ぬぞ」と声がするので、一度はなれる。

そしてその時初めて啓太はその『忍者』を認識する。

「遅いよ。兄貴」そう。隆一も合流したのだった。

久々の兄弟そろっての活動に対して余韻に浸る事も無く、隆一も刀を抜く「いくぞ」忍者をにらみながら隆一は静かに言った。

隆一は二刀を正面から斬りかかる。だがもちろんそんな攻撃は通じない。と思われたが隆一は斬りかかる瞬間に縦向きに回転する。

「虎噛み」技名を隆一が言う。忍者の腕をかする。

「っふ」忍者は笑う。

「攻撃が効いているようだな。追い忍者！まさかこんなことで驚いてるんじゃないだろうな？今までの事件からお前が氷結系の忍者だということすら俺達は判っているんだぜ。」と啓太が言う。啓太は全く捜査に協力していないのに、まるで一人で捜査をしたかのようと言う。隆一は突っ込みを入れようとしたが、突っ込みを入れると自分の方が捜査に協力しただけに思われそうなので、スルーした。

「今までお前が大名のために働いていた事は知っている。そしてその事を注目されないように最近山賊の殺人事件に及んだ事もな」

啓太はその忍者の反応を待つが、なんの態度も：剣を構える事さえしなかった。同様に誘うために話した事だったが、徒労に終わっ

てしまったようだ。

仕方が無いので啓太は「そのカムフラージュから、捜査が始まった事はお前にとっては思いもよらない事だったんだろうがな・・・」啓太はそう言って微笑を浮かべる。しかしその笑みは突如として現れる一瞬の、しかし確固たる思いを孕んだ強烈な殺気により掻き消された。

「やばい」真治はそう小さく叫ぶと直ぐに移動する。『何処へ』ともなくただ自分が立っていた所から離れる。

「ザクザクツ」と後ろで音がする。

真治は恐る恐る後ろを見る。するとそこには何本かの白い柱が刺さっていた。

さっきまで何人か侍と戦っていた啓太は自然に『自分がもしあそこで立っていたら・・・』という事を考えて思わずしりもちをついてしまう。

「っあ、あ。っうー」と呻きながら真治は立つ事も出来ず反転して、先程まで『自分がいた場所』から『之から逃げなければいけない場所』に視線を移し逃げようとする。

弟がうろたえている間隆一は忍者の正面に立ち剣を構える。

「おい。真治何をうろたえている。それはタダの氷だもつとシャキっとしろ」

隆一は啓太を奮い立たせる。といっても、啓太が相手になるような者でないことは隆一は理解している。

ただ自らの『法規』を守る側の啓太の醜態がどうしても我慢できなかったのだ。

「お前・・・私の術の本質をどうやって知った？ばれるような失態はしていないはずだが？」基本的に忍者は戦闘中に喋ったりはしない。が、どうしてもその忍者は聞いた。

「私の里でも珍しい忍術で、対処方法を知っている人間に至っては始めて会ったぞ。」よく聞いてみると、女の声だということに暫くして隆一は気付く。

忍者と隆一達が戦っているときに真治はなんとか戦闘を終わらして、大名を探す。・・・『部下数十名とで』である。

（もう少しで本隊とも合流できそうだな）

真治がフラフラになりながらそう考えている間に『城之崎を捕縛した』との、部下からの連絡を真治は聞いた。

暫く経って忍者との緊迫していた空気が流れていたがその場では流れていたが、そんな空気は「隆一殿ー」というのんきな真治の一声で終わった。勿論のんきな声だったからではない。手首をぐるぐる巻きにされた城之崎を三人が見たからだった。

忍者は舌打ちをした後に地面に手を付け「零凍土」と技名を言い逃走した。その忍術は、目くらましのような技だったので逃がしてしまう。真治達が追うが隆一は止めた。

これにて「龍賀谷山賊殺人事件」は実行犯を逃がしたまま主犯格であった城之崎を捕まえて終わったのだった。

「龍賀谷山賊殺人事件」 終章（後書き）

次回 虚史 「龍賀谷山賊殺人事件」 追憶 というタイトルで書きます。次回は事件の裁判が終わりまた町が平和になり始めたところの話です。

〔龍駕谷山賊殺人事件〕 追憶（前書き）

〔龍駕谷山賊殺人事件〕 追憶は〔龍駕谷山賊殺人事件〕の最後の話であり、次の虚史にバトンタッチするために、最後には数々の進出単語が出て来て今回の事件の謎が解ける代わりに、また新たな謎が出てきます。しかしそれは・・・。

「龍駕谷山賊殺人事件」 追憶

城之崎邸一斉捜査が終わった次の日。

「あいつどんな目に遭いますかねえ？」捜査資料を調べながら真治は言う。やっぱり死刑っすかね？と続ける。

「どうせ金払って終わりだろうよ。」真治とは別の捜査資料の最終確認をしながら隆一は吐き捨てるように言う。彼らは、先日の事件で階級が上がり真治は隆一と同じ階級の捜査現場監督になろうとしていたが、慌てて隆一が推薦して現場事情調査課総監督就任した。そして隆一は、捜査所現場総監督となりこの駕楼都における全ての事件の総監督をしている。

「じゃ、じゃあ私達の行った捜査が無駄ではありませんか！我々の階級が上がったことしか意味が無い。我々の・・・」階級が上がったことがとても嬉しいらしくずっと階級が上がったことを連呼する真治。

「いや、俺達の捜査によりもう城之崎はあんなことができなくなった。それに城之崎の多額の違法な金が市民に循環する。それに城之崎は実際には人を殺していないからなあ・・・。それにだらだら捜査をしていたら中途半端に事件の真相に近づいてあのくノ一に俺達は殺されていただろう」と隆一。昇進については触れない。因みに真治はくノ一には遭っていないが、資料を読んだので一応軽くなら知っている。

「いやあでもまさか、侍やおてまさか忍者とは思いませんでしたなあ・・・最初に事件の説明を聞いたときからずっと侍やと思おてました。」と啓太二人とは違いかなり暇そうである。

「ま、アレやなそれは俺の責任やな。適当なことばかり言ってたからな。『なぜだ』とか言う台詞も誰も聞いてない台詞やしな。でもまあ噂は誇張せえへんかったら面白いからなあ」と誠二郎は

自分を正当化する。なんか頷いたりもしている。ちよつとウザイ。

「あ、あの忍者ですけどね・・・」と誠二郎は忍者について調べたことを説明しだす。

所変わってとある森の中。月明かりが雲に隠れたので薄暗い闇の中にもかかわらず周りでは、野鳥の一声もしない。

「貴様が任務を遂行できなかったとは珍しいな。」どこからか男の声が聞こえる。声からは、感情は伝わってこない。

「確かに氷柱さんは自分の忍術を確立させてからは全く失敗はありませんでしたからね。」別の男が言う。やはりどこから聞こえたのか判らない。

「で、貴様の任務の邪魔をしたのは誰なんだ？まさか貴様の失敗で遂行できなかったわけではないのだろう・？」最初の男が言う。

「それは私が説明しよう。」また別の男が言う。今度の男は、隠れようとはしない。勿論堂々うとしている訳ではないが・・・。

「何故貴様が此処に？お前は確か大量殺戮者『曾根崎 縛斗』の遺したといわれる4大流派を調べていたはずだが・・・。」最初の男が言う。どうやら別の仕事を彼はしていたらしい。

「あの田舎に曾根崎の流派の一つ、『二刀流剣術 獣術殺法』が残っていた・・・という噂を聞いたから来たんだ。」隠れようともしない男は言う。

「ほう・・・で、真実は？」最初の男が言う。少し声のトーンが上がっているようだ。

「確かに流派はあった。しかし我々の計画に支障をきたすような出来ではない。心配は無用だ。俺がそいつ等が飯食っていた所に入ってもあいつ等は何も反応していなかったからなあ・・・フフただの雑魚だよ。」あいつ等というのを馬鹿にしたように言う。

「そいつ等が私を打ち負かしたのか……。」氷柱は虚しそうに言う。

場所は戻って捜査所本部。誠二郎が忍者について説明する。

「あいつは轟忍軍というおんさつがしらじゅうさんれんたい隠殺頭拾参連隊の一角に所属している氷柱という女忍者だ。もっとも、拾参連隊といっても自分達の里以外とは全く群れない。それどころか、機会があればお互いに抹殺しようと考えている。」苦々しく言う。

「で、あいつは轟き忍軍の頭領か何かか？」隆一は聞く。忍者のことは全く判らない。

「いや、あいつは頭領ではない。あいつは轟忍軍のいくつかの団体のうちの一人の工作員だ。主に単身で敵地に乗り込み標的を暗殺することをしている。今回のように大名に取り入ってちまちました殺しをするようなことは、基本的にはあいつの仕事ではないようだ。」と事細かく誠二郎は説明する。隆一はただただ感心するばかりである。ほかの二人は、口をポカーンと空けている。馬鹿丸出しである。

「氷柱は雨の日においてならば、彼女の所属する団体では一番強い。といっても晴れの日ならば、4人いる内では3番目のところに当たるらしい。もっともほかの3人の力量は知らんがな。」として、全ての情報を誠二郎は報告する。

「成る程なー。この町にいる。最強の剣士として有名だった、『竜崎 重松』でさえ殺されていたからなあ。ま、もう一生関わり合いたくねえ奴だよな。」真治は笑いながら言う。

「俺よりもか？」と隆一は冗談っぽく言う。本当に彼にとっては、ただの冗談だったのだが、真治が本気で考え出すという醜態を晒したのでキレた。

「ウゲェ……」真治が隆一に首を絞められ、音を発せさせる。残り二人は、笑いながら見ている。

之にて追憶は終わる。・・・勿論之で終れるのだが、轟忍軍の之からの動向も気になるのでそちらに最後は移る。

「最後に氷柱。『神鳴』と一緒に之から任務先に行け」はいと氷柱は言う。が、氷柱は反射的に言うが、反論をする。

「失敗の埋め合わせだろ。反論をするなよ氷柱さん。」なだめるように男は言う。氷柱は何も言うことが出来なくなる。

「はい。判りました『鎌鼬』さん」と最後に氷柱は諦めたように締めくくる。

「それでは之で単独部隊『邪柳』の臨時集会を終わりにする。」と鎌鼬と呼ばれている邪柳の頭の役割を果たしている男は言った。

「解散!」という言葉で全員解散した。といっても一人伝えたいことだけ伝えきった忍者は、解散の言葉とは関係なく帰ろうとしていたが・・・。

頭も含めて邪柳隊所属忍者が全員其処から消えると、今までの静寂が嘘の様に野鳥の声が鳴り響いた。

之にて「龍駕谷山賊殺人事件」は追憶まで終わり物語は終わる。しかしこの事件は隆一とその弟の啓太そして部下の真治そして幼馴染の誠二郎達そして隠殺頭拾参連隊おんさつがしらじゅうさんれんたいと侍のソレに当たる星七剣衆せいななけんしゅう。そしてそれに関連する人々の虚しい歴史の始まりに過ぎなかった。

〔龍駕谷山賊殺人事件〕 追憶（後書き）

なんとか終わりました。次回は虚史 〔嗣乃村妖怪戦線〕 をお
楽しみに。

次回は、今回の事件が起こるずっと前同じ年の一月の下旬の物語
でこの物語の謎に迫っていきます。

『阿乃村妖怪戦線』 下調べ（前書き）

今作はちゃんと考えてから、作り始めたので今までよりは自身があります。

今回は無理やり後付けで誤魔化したりする様な無様な真似はしないように心がけました。

町が燃え住人達は逃げ惑う。火の回りが異常に早いこの惨状においてなぜか逃げずに家事の現場に走っている上から下まで真っ白な服を着た男がいた。野次馬というのではなく、至って真剣な眼差しである。その男が大声で叫んだ。

「結び目！上から敵を捕獲しろ奴の被害を最小限に抑えるんだ。」
また白い服を着た人間が何処からともなく飛んできて、両手を開いた。「よし。」何がよしなのか何も変わっていない。ただ火が回る速度が緩まっただけだ。

「殺し目は属性で少し弱らせてから片を付けろ！油断するなよ以外とこいつ強いぞ」男が言うといつの間にか男の隣に別の白い服を着た子供が札を炎の勢いが一番強いところに投げた。驚いたことに札は燃えずに宙に浮いている。

その後少し経つと札を投げた箇所火の勢いが嘘のように消えた。男が何かを言っている。すると今度は、残っていた火が全て消えた。「つく大分被害がでたな。まあ誰も死ななかったことだけでもよしとするべきか。」

もし誰かが彼らの仕事の一部始終を見ていたら、八割方の彼らの部外者の人はこうまとめるであろう。彼ら人外のを退治し、人の道を超えた忍者や侍の技に彼らの同業者以外で唯一対処できる『陰陽師』達の仕事を見れば……。言うまでもないが、あえて言う。八割以外の人間とは、忍者と侍の最上位に位置する人間達である。

今回の虚子は、そんな陰陽師の中において最高の後継者と思われる。いる青年の初めての死線の一部始終である。

青年は古そうな巻物を読んでいる。「んー。成る程。」などと言っている。この状況だけ見れば、彼がいかに賢そうな青年に見える。が、悲しいことに青年は書いてある中身が全く理解できていない。といっても、彼が読んでいるのは陰陽師の業である妖怪退治の基礎が欠かれている巻物だということを判っていて彼は読んでいるのだ。しかし悲しいかな・・・彼は意味が全く判らないのだ。

「平等丸！」平等丸とは青年の現在の名前である。彼の家では陰陽師として立派になれば改名できるので、願懸けの意味を込めて、変わった名前を付けているのだ。「こんなところでそんな物を読んですぐ一緒に練習しますぞ！理論よりも実践する方が覚えられるのですからね！」大柄な男は言う。

「判ったよ奏流丸・・・。」平等丸は申し訳なさそうに言う。平等丸は、実践で全く効果が得られなかったので理論から入ろうとしていたのっただがそんな事は言えない。結果が出なかったからである。

判ってはいいるだろうが、彼らは最初に登場してきた陰陽師たちの仲間である。

外で子ども達が式神と契約をしている。式神とは、妖怪や精霊の類と契約することで如何なるときでも助けてくれる。万能な相棒である。勿論良い所ばかりではなく、精神状態がしっかりしていない時に使うと精神も肉体も喰われる。

平等丸は、一応これもやってみたが運の悪いことに契約段階で無理だった。しかし弱気な平等丸はこのことを思い返すと、「もし偶然うまく契約できていても今頃は式神の餌食であっただろう。」と、だから運は良かったのだと思うのだった。

その様に考え事をしていると、「おい、あいつだぜ。」契約している子どもの内の一人の子どもが言う。「ああそうだな。」とまた別の子ども二人はどうやら言いたいことがあるらしい。だが奏流丸

がいるし自分より格上であると聞いている平等丸を前にして気が小さくなっている。二人の言いたいことも言えない仲間を見ていられず、他の子ども達の大將的雰囲気をかもし出している子どもが前に出てきた。

「おい。平等丸！お前がこの有名な陰陽師である『嗣乃組』の次期頭首だとは俺は認めないぞ！頭首ってのはずっと努力した優秀な術者が成るのがいいんだ。お前がどれだけ優秀なのか知らないが、今の時点で決まっているというのは、不公平だ！」仲間が言いたかったことを彼が代弁する。彼らはほかの子ども達と同様に平等丸を妬んでいるのだった。

「懺悔丸。確かにお前の言うことは間違っていない。だがお前もきっとわかる時が来る。こいつが・・・平等丸が頭首である必要が・・・。」奏流丸は平等丸を見て言う。

平等丸は俯いている。この時が一番平等丸にとって嫌いな瞬間だった。

彼が出来る陰陽術は、四つだけだ。まず『幻診』である。これはありはしないものを診る能力である。その次に『裂け診』。これは敵の『氣』の濃度の低い所を診つける能力である。そのほかに『先診』。これは一般的に予見のことである。そして最後に、『伝心』という思念波である。これらは勿論陰陽師の中でも珍しい。

しか、妖怪を攻撃する系統の技がなぜ出来ない。こんな事では頭首どころか改名の許可つまり、一人前の術者になれるかどうかさえ怪しい。にもかかわらず、嗣乃組の隠居どもは、自分のことを頭首にしようとしている。他人が自分に自分の限界以上を期待する。しかし、自分はそれに答えることが出来ない。惨めだ。

平等丸は逃げたい気持ちをこらえる。これ以上奏流丸を失望させたくはなかったのだった。

「それが・・・王者の気質か？余裕というのか？っクソ！俺のことなんか相手にしないってのか。」懺悔丸は最後の方は、声が小さくなる。どうやら平等丸が考え事をしていたときの様子を診て懺悔

丸は自分達を相手にもしていないと勘違いしたようだった。彼は二人に合図をして去る。最初は歩いてきたが堪らなくなりだんだん小走りになり最後は走っていった。

3人が逃げてから暫く経つと平等丸は奏流丸に「御免・・・少し一人にさせてくれ。」と言ってふらふらと歩いていった。

場所は変わって懺悔丸達は街中を歩いている。因みに、上から下までの真っ白な戦闘服は、自らを清めるための服で修行のときと任務のとき意外は、侍やら農民やらの一般の人達と同じように普段は和服を着ている。そのため彼らが街中にいて浮くことは無い。

駕楼都とは比べ物にならない大きさを誇る罵玖都は星七剣衆の一角『万刀流心剣術』の名家である。ばんとうりゅう・・・といっても星七剣衆が在るか無いかは、大きな都の基準でもある。そのため罵玖都というこの国でもトップクラスの都にあるのは殆ど当たり前である。といっても駕楼都にはなかった。

「そういやあ最近ここの妖怪が以上に強くなってきているって聞いたか？」と三人組のうちの一人が言う。

「どういうことだ？そんな事は聞いたことが無いぞ。説明しろ陀手朗。」全く感情のこもっていないように懺悔丸は言う。そして「とても言うと思っているのか？」と聞き返す。

「いやあ・・・知っているのを前提で僕はちゃんと喋っているよ。あんたの兄貴が最近のここの仕事の指揮を取っているって事実をちゃんと記憶しているぞ。うん。」陀手朗という男は誤解を解く。懺悔丸はどうでもよさそうにしている。

「じゃあ俺達だけで今夜この辺りを調査しませんか？」もう一人が思いついたように二人の前に立って言う。

「良い考えですね休兵衛さん。私たち三人がいれば確かになんとなかるかもしれません。」陀手朗は楽しそうに言う。

そうしていると、思いついたように「イヤ、念には念を入れる。」ということでは我々の頭に隠居の皆さんが推している彼を呼びましようよ。平等丸さんをね。」いやらしそうに、懺悔丸は言う。勘違いされがちだが、彼は至って一般的な人格を持っており、単純にみんなの言っている力量の違いを診ようとしているのだった。決して弱者を戦場で見殺しにしようなどとは思っていない。

冗談で言っていたのに懺悔丸が本気にしているので、二人は焦っている。もう引けない。提案した休兵衛に至っては、口を中途半端にあげ呆然としている。無理も無い自分の不始末でもしかしたら死ぬかもしれないのだ。このまま改名の機会も無く死ねば墓石に現在のふざけた名前が記されてしまう。後悔の連続である。

物語が陰陽師一色の中遥か先の竜雅塚りゅうがづかといわれる地に物語は移る。小柄な少年が一人で話している。が、その少年以外に何人かの男や女の話し声が聞こえる。どう見ても殺風景な何も無いただかなり大きな七つの水晶が奇妙に光ながらゆらゆらと浮いているだけの部屋だ。

「最後の質問だ『摸戦丸』。罵玖都に居座っている嗣乃組の現在の戦力はどうなっている？」男は聞く。

「何体か式神を放ち調査しております。今のところ今まで通り代理の頭領でやっておりそれほど高い結束力はないものの個々の能力もやはり今まで通りといった所です。」水晶を通して声が伝わる。水晶は光を失い床にゆっくりと着地する。

「次に『駿神』。極最近まで我々の実態を知ってなお、我々に反乱を行っていた『曾根崎 縛斗』の動向はどうなって折るのだ？」男は問う。

「はい。現在おんさつがしらじゅうさんれんたい隠殺頭拾参連隊にも数えられております、ばくろう爆轟忍軍末端機関の山椒魚を使い調査しております。」水晶からはさつきま

でとは別の声が聞こえる。水晶からなので、感情は伝わってこない。それを聞いた少年は不愉快そうにしながら「忍軍なんてのはいい。おんさつがしらじゅうさんれんたい隠殺頭拾参連隊なんてのがあって忍者共は調子に乗っているが、忍びつてのは金をちらつかせられればすぐに心変わりして信用ならん。軍隊なんてのは程遠い。だからあるのは忍びの群れだけで、精々忍群だけだ。」蔑む様に言い放ち、悪態を打つ。何年間も忍びに裏切られ続けて来た様に言う。少年にしか見えないのに……。

彼ら『新大和改革党』という名称の軍事組織は大衆に気づかれる事も無く徐々にこの国を陰から制圧していくのである。

『嗣乃村妖怪戦線』 下調べ（後書き）

次回『嗣乃村妖怪戦線』 開戦 お楽しみについてどうか読んでる人もいない自己満足な小説では誰も楽しみにしてませんが・・・。
他人が読んで面白いと思える小説を目指します。

『阿乃村妖怪戦線』 開戦（前書き）

なんとか終わりました。いや、終わってないんだけどね。厳密には次の話で終わるか、もう一作懸かるかもしれないし……。うんまあそんな感じで。

やっぱり戦闘シーンは時間がかかりますね。昨日のうちにアップしようと思っていたのに、結局今日になってしまいました。っじゃ読んでください。

「嗣乃村妖怪戦線」 開戦

嗣乃村の夜は何処の何時の時代の夜とも一見して同じように思える。しかし、嗣乃村は地脈の関係上妖怪やらの現象が多く発生する。そんな夜の嗣乃村において、走り回りはしゃいでいる子どもたちがいる。と、見えるのは一般人だけで（逆にそう見えない方がおかしいのである。）本当は彼らは妖怪退治に勤しんでいる訳である。

その子ども達とは、平等丸・懺悔丸・陀手朗・休兵衛の四人である。彼らは、昼頃に話していた計画を実行したのだった。今彼らは火をまとう妖怪と戦っている。やはり通常と比べるとかなり強い。が、彼らは焦ることなく順調にこなしている。

むしろ焦っているのは彼らではなく彼らの戦っている妖怪の術者のほうである。彼の調査では今日は奴ら……つまり陰陽師共はここいらには巡回に来ないはずだった。彼の名前は猊戦丸というこの罵玖都における新大和改革党の情報収集係である。

しかし焦っているといっても、自分の絶対的な式神の……陰陽術の力は奴らの陰陽術に負けるわけが無い。自分は新大和改革党においてもかなり優秀な式神使いなのだから…。

彼は調子に乗った改名前の陰陽師には荷が重過ぎる。

所変わって嗣乃組本部大広間。隠居どもに混じって、奏流丸がいる。今回は緊急集会で実際には行わずの無い会議のはずだったが、召集率は脅威の十二割である。つまり呼んでいない者まで集まってきた訳である。議題は勿論最近以上に強くなってきている妖怪の話である。

「今回集まってもらったのは……呼んでもいない者も……何人か

いるようだが……。他でもない。――」喋っている隠居は現在の『代理の頭領』である清十郎という男である。

「間違いなく裏切り者の仕業だと思うのですが・・・誰だと思えますか？最近では間違いなく我々嗣乃組の頭となり、行く行くは陰陽師の最高指導者になるはずだった『爆瑠炎天丸』様が裏切り、今までもわれらの組以外にも裏切り者はもはや数え切れません……」奏流丸は嘆きながら言う。彼は爆瑠炎天丸の弟なので当然の反応である。

「確かに……。我々は今まで多くの逸脱者を世に排出していった。嘆いても嘆ききれない。」布で顔を隠している男は、自らの失態を悔やんでいるように言った。しかしその割には、裏切り者を逸脱者と言い美化している。それにより調子の良い男……とも映る。

沈黙が続く。そして誰とも無く『曾根崎 縛斗』を起用する案を採用することとなった。

隠居共が今後の対策を一生懸命練っている間彼らの思いも知らず子ども達が事の発端となる猊戦丸と戦っている。

「つうらああ！」陀手朗は妖怪に対して、定石どうり五行相刻の水剋火の法則……つまり陰陽師の戦闘方法で片を付ける。……いや、付けようとした……と言った方が良さだろう。何者かに邪魔をされてしまったのだ。

「ん？俺の『猪突水』が『猪突土』に相殺された？どういうことだ？」陀手朗はうろたえる。今まで妖怪との戦いにおいて陰陽術で自分の技が『対抗』（対抗とは、対応する属性で相手の技を相殺する技だ。）をされた事は無かったからだ。

「なんだ……馬鹿馬鹿しい。子供か……上からの命令なしで独断で動いたのか。おおよそ何も知らずに遊びに来たのかな？つま、どんな意図だろうが私の計画の邪魔になるので死んでもらうぞ」男は……というか猊戦丸は町の屋根から見下し言う……。

「ま、まさか陰陽師……？」消えそうな声で休兵衛は言う。

「おい、懺悔丸危ない！」と平等丸が懺悔丸に体当たりする。

「危ねえのは手前だ！なあに戦場でじゃれてきやがる！」ぶつかられた方はたまった物ではない。という様に怒鳴る。が、すぐに今まで自分のいたところを見て呆然とする。火の玉が……その空間に位置していたのだ。……球体状に……確かこの技は、座標転送の一種で術者の決めた所に一定量の五行即ち『火・金・木・土・水』の球体を自然の摂理を無視して召還する……『五行弾招来』か……など考える。

猊戦丸は首を傾げている。それを見て「技の発動になぜ気が付いたについたのか不思議に思っているのかもしれない。しかし、流派によって違いがあるとはいえ、術の発動に気づく事など大した事ではないのに……何を思って傾げているのだろう」離れて見ていた休兵衛は思う。

その間に「いったん引くぞ。」陀手朗は提案する。そして両手を合わし、『水縛身』と唱え猊戦丸の動きを封じる。

場所が嗣乃組本部大広間に戻る。さっきより人数が減っている。

もしかしたら『曾根崎 縛斗』を水晶で探しているのかもしれない。

因みに『曾根崎 縛斗』は陰陽師達と新大和改革党との戦いにおいて英雄と呼ばれている剣士のことである。……といっても一般的には大量殺戮者として認知されており、彼を殺害するためだけに結成された。星七剣衆の魔双槍術者なんてのもいる位嫌われている。

「で、爆瑠炎天丸の息子はどうしている？確かあいつには、術者にとっては呪いとも取れる呪いのろが施されていたはずだろ？」代理の頭首が聞く。

「ええ。少しずつ力を制御してきています」と布で顔を隠している男が言う。

「しかしまだまだといった所です」別の布で顔を隠している者が言う。顔を布で隠すのは最高位に位置する限られた者の嗜みである。そんな余談をしていると二人の男が走って大広間に入ってくる。この男は布で顔は隠していない。大広間に居る者がみなその男に注目する。

「敵の……正体が判りました。敵はやはり陰陽師でした。おそらく六世代前の沙羅組の裏切り者の末裔です」しかし、そんなことはどうでもいい事かのように、調べてきた敵の情言い放つ。

そして「現在平等丸・懺悔丸・陀手朗・休兵衛の四人が交戦中です。理由は判りません」彼を含めその場に居る全員が顔色を変えた。絶望的な顔色に……。

場所は戻って物語は戦場へ……。

『水縛身』で一行は敵の動きを封じ、逃げるのだが、猯戦丸は直ぐにそれを簡単に解除する。

彼は一番弱そうな平等丸をまず片付けようと考えながら、式神の『火炎鯨』を五匹程放つ。元々この式神は一带が炎の海にでもならない限りは使えないのだが、今彼は『火炎鯨』の周囲に自分の作り出した炎を巡らして活動させている。『五行弾招来』の様な技なのである。

彼は優秀で大概の事が出来る。

今や四人は猯戦丸に包囲されつつある。

しかし、猯線丸は忙しい。一々包囲出来るまで待たずに雑魚から片付ける。

「死ぬ」冷酷に言う。四方同時発射の座標技である『爆芯炎』で平等丸を狙う

が、座標からぎりぎり抜けうまく逃げる。

「ん？」さっきからなんだ？と猯戦丸はずっと抱いていた違和感

の確固たる原因について考える。

最初に使った技は五行相生の法則により炎から作り出した『土潜^{どせん}鮫^{さめ}』だった。それがちんけな猪突土として出された。速度と威力が弱すぎたのかと思った。確かに土系統の技はどんなに頑張ったって火属性の3文の1しか威力が発揮できない

そしてその次に繰り出したのが『五行爆裂弾』だった。これは最後の爆発が起きなかった。得意属性でこんな事態が起きるとは思えない。

そして先ほどの『爆芯炎』を避けた事・・・？つふ。イヤイヤ、一体なんだと云うのだ？なんでもない。ただ火力と座標位置が変わっただけだ。なんでもない。

この気持ちの悪さはきつと体調が悪いのだろう。慣れない土地で食べたものが悪かったのかもしれない。

彼が今戦闘中でしかも、ここいらの地脈を変化させることで、2年後の第6次『国家転覆戦争』で勝つための下準備をするためには、今日でないといけない。今日出来ないという意味が無い。……といったことが無く、後日本件の資料を読んだのならばこの異常事態に気づいていたかも知れないのに、そんな馬鹿な答えを彼は本気で思っていた。現在の事態は明らかにおかしい。

ここで五ヵ月後に「龍賀谷山賊殺人事件」を解決した侍の隆一と比べるのは酷な事かもしれない。

いや、どう考えても、第8次『国家転覆戦争』において勝利を収める事になる男と比べるのは……酷な話である。しかし彼なら恐らく気づいていただろう……これから先獏線丸が気づくであろう事を……。

しかし、急いでる彼はそんなことは関係ない。難易度の高い陰陽術を連発する。

そんな中、四人はぎりぎりの所で避ける。

陀手朗は逃げながらも拘束系の技をかける。

休兵衛は水に圧力をかけて放出する『爆放水^{ばつぱうすい}』で鮫の周りの炎を

片付ける。鯨に水を与えて殺すのである。

一匹の鯨が泳ぐための炎が無くなり溺れる様にもがき消失する。
猊戦丸の攻撃を懺悔丸が解除して三人を守る。

いい加減我慢の出来なくなった猊戦丸は炎の陣を両手の上で生成して一気に炎を放出させる。

平等丸に炎の流星群が落ちる。

しかし全てを避けきる。

「本当にやべえな」口々に三人が言う。明らかに避けれる攻撃ではなかった。

「なんだ？ 対抗……ではない。中止されているのか……」今やつと猊戦丸は彼の重要さに気づく。

しかし、そんなみんなと違い、平等丸本人は偶然だと思っていた。

水晶から広間に居る隠居どもは、戦闘の一部始終を見ている。

「おい……。」奏流丸に出動命令を出そうとするが、もうそこには居ない。どうやらもう行ってしまった様だ。

「しかし、平等丸はいい仲間を持ったな。……嗣乃組に危機が訪れた、今回のような時に、一緒に就いてきてくれる仲間が、三人も居るなんて。……しかもその三人が、現段階において嗣乃組最年少で妖怪と対等に戦える懺悔丸・陀手朗・休兵衛の三人とは。……予言は実行されそうだな。『人外の力を封印せし力を継承せし者。』

国の命運を決める戦いにおいて、魂の仲間とともに究極の流派を使い分け勝利をつかまん』という予言が」顔を隠した今までで一番若い声の男が言う。色々間違っているが、他の者どもも頷く。

「今回の敵は、あいつらと力量の差が大きすぎる」頭首が言う。だが声色からは焦っているようには聞こえない。頭首は「もし敵があいつらの力量と肉薄していれば、経験の浅いあいつらが殺されていただろう……。だが、今回は力の差が大きすぎた」満足そうに締めくくる。

明らかにおかしい話だったが、部屋のみんなの顔を見る限りは、筋の通った話だったらしい。

嗣乃村妖怪戦線は終焉に近づいている。
四人の勝利は目前だ！

『阿乃村妖怪戦線』 開戦（後書き）

どうでしたか？感想を聞かせてください。

ところで僕の小説って読んで疲れませんか？目がちかちかする……とか。

最近段落の間に空白の行を入れた方がいいのかもしれないなあーとかって考えてるんですよええ。

『嗣乃村妖怪戦線』 日輪（前書き）

ふー。

学校のテストも終わりようやくパソコンが触れるようになった。

陰陽師の戦闘もこれでようやく一段落着いたぜ！

まあ読んでくれ。

平等丸・懺悔丸・陀手朗・休兵衛の四人は猊戦丸と戦っている。力関係でも数でも彼らは負けている（式神を猊戦丸がアホみたいに出すからだ）。

しかし、精神面では彼らの方が勝る事になるのだった。因みにそれは経験の差からではない。いや、むしろ経験でも負けている。

之から先『新大和改革党』の起こす『国家転覆戦争』にて活躍する一人の陰陽師の最初の戦線はそんな精神面だけでしか勝てない負け試合状態なのだった。

平等丸・懺悔丸・陀手朗・休兵衛の四人と陀手朗とが戦いだし、から暫く経った。

五人は走り近くの池まで来た。

平等丸の能力で戦闘はやりやすくなっているものの、元々の自力が違うのでなかなか猊戦丸に攻撃できず、逆に猊戦丸は攻撃を繰り返している。

しかし、攻撃自体は殆ど彼らには当たっていない。平等丸の四つの能力の効力で、である。けれどそれだけでは、説明の出来ない事態になってきた。

炎を扱い五行の法則より弱点が水である猊戦丸がここに来たのは、完全なる陀手朗の作戦であった。

勿論いつもの彼ならばこんなことに陥る訳が無かったのだが、現在の彼の精神状態は最悪の状態であり、考え事をしながら戦うという普通ではない行動の結果だった。

陀手朗は式神の一種である大量の陰陽武具を射出する。生物の式神では調服契約の上書きをされて、式神の命令権利を奪われる

可能性があるからだ。

しかし発動する前に猯戦丸の生き物の式神に陀手朗が攻撃をされ、技は発動する前に解除されてしまう。

「よくも陀手朗を！」猯悔丸と休兵衛は怒鳴る。

「これで少しは動きを止めさせれば……光明が」休兵衛は池の水を使い好条件下で、大技をかけに行く。

猯戦丸は軽く避ける。が、水が蛇のように巻きつく。

休兵衛が技の成功に安堵の表情を浮かべる。が、しかしその表情はすぐに驚きの表情に変わる。猯戦丸の居た場所には炎の火柱が立っていた。

「おいおい、それは反則じゃあ……」休兵衛は聞き取れないぐらいの小さな声でそう呟いた。

休兵衛の技を難なく交わした猯戦丸は休兵衛を攻撃する。

猯悔丸は猯戦丸の攻撃を力技で対抗する。が、猯戦丸の攻撃は完成度が高くそれに比べて、猯悔丸の技はまだ完璧ではなかったので対抗が失敗に終わる。

「っう」猯悔丸は攻撃をぎりぎりで避ける。一応術を弱体化させたのでぎりぎりの所で事なきをえた。

猯戦丸はなかなか終われない戦闘を終わらせるために『炎獣・獅子咆哮』たる大技を発動させるための陣を天空に広げる。通常この技は広い範囲に居る大勢の敵を殲滅するための技でこんな数人の雑魚を相手取る技ではない。

この技さえ成功すれば、平等丸達は全員死ぬことになる。

しかし、そんな発動してしまえば勝負が終わってしまいそうな術は発動しなかった。

猯戦丸が陣を構えた瞬間に平等丸は、頭の中に陰陽の文字列がっうすらと浮かぶ。そして今までとは、比べると圧倒的に猯戦丸の術が失敗した。

時間は数分前の奏流丸達に戻る。

奏流丸は甥の平等丸が敵の陰陽師と交戦している事を知り、仲間数人と一緒に平等丸達の所に現在移動中である。

「平等丸はまだ力を扱いなれていないんだ。」息を切らしながらも、奏流丸は数人の仲間に話しかける。

「平等丸は自分にかけられた陰陽術の術式を少し変えて自分の身を守る程度なんだ」奏流丸はそう嘆く。

「それが本当なら、他の三人が危ない。このままでは何人か死ぬぞ」一緒に移動している内の一人が言う。

しかし彼らのその情報は、今までの戦場を経験してこなかった、平等丸の『実力』の話で、実戦を経験し平等丸は眠れる力を扱う糸口を見つけていた。

「おい。何だあの陰陽起発陣は」暫くしてから平等丸

天空にはまだまだ戦場にはたどり着いていない奏流丸達にも見える『炎獣・獅子咆哮』が広がっていた。

「つく。せめて能力を第一段階でもいいから、発揮できればアレぐらいの大規模な『陣』なら少ししいじるだけで自然消滅するのに……」奏流丸は言う。

そう。高等術式は単純な術式と比べて少しでも組み間違えると、正常に機能しないのだ。

「っえ？マジ……」猊戦丸はそんな馬鹿みたいな台詞を自分の伸ばした両腕の更に上を見て言った。彼の見た先には驚くようなものは何も無い。そう、発動直前の自分の陰陽術のための陣さえも……。「まさか……陰陽術の使用出来なくなる出来なくなる結果でも張られたのか……？」いや、それにしても何故今？もっと早く発動すればよかったのでは？そんなことを猊戦丸は思う。

しかし、彼はその考えが間違っていたことに気づく。

猊戦丸の隙を見つけた陀手朗がすかさず攻撃を仕掛けた。絶対にこないと思っていた種類の攻撃が来て猊戦丸は焦る。

「なんだ、何故使えるんだ？限定的に発動するのか？」などと考え、そしてまた同じ技を発動しにかける。一度失敗しても、もう妨害行動は起きないだろうと短絡的に考えたのだった。

しかしまた不発に終わる。にもかかわらず陀手朗・休兵衛は陰陽術が使える。一瞬猊戦丸の頭が真っ白になる。だが次の瞬間今まで不甲斐無かった彼でも気づいた。

「やっちゃまった……」猊戦丸は間違いに気づく。この現象について聞いたことが彼はあった。

彼は最初に聞いた時は都市伝説程度に聞いていた。だが今やっとその間違いに気づく。それは術式変換術系統の中でもほぼ禁術としていされている『柳生葬慈朗式妖術変換術』だ。

これは、今のようにつもの陰陽師宗派に分かれる前の、陰陽師一代目頭領の柳生葬慈朗が作った術だったが、発動条件の一つから禁術とされた技だ。

そしてこの術の特性は、術の発動を阻止するのではなく術を無効に組み替える技だ。そして未熟な平等丸は変換するような複雑な術だけ変換でき、変換する余地のない技だけ変換できなかったのので、猊戦丸は術を発動できず、平等丸・懺悔丸・陀手朗・休兵衛達の術は発動したのだった。

しかしそんなことが気づいても意味はない。今の猊戦丸は完全に拘束されている。

「こ・こいつううらああ」猊戦丸は何も出来なくなる。もはや陰陽術を使えるだけの精神力などなくなっている。大陰陽術を連発させ、しかもそれが全て逆効果だった事を理解してしまったのだ……

無理もない。

「ッバ！」と静かに音を出し奏流丸たちが猊戦丸を捕縛した平等丸たちに合流する。

「うおおーこの馬鹿共がああ！」奏流丸が四人を一発ずつ殴る。そして四人にとっては、理不尽で普通に考えれば妥当な叱りを四人は受けた。

「つまり、懺悔丸。貴様が今回の原因だということでもいいんだな」奏流丸は、四人から聞いた話をまとめた上で確認を取る。

「はい。全て俺が平等丸の実力を知るための私の独断で……しました」懺悔丸は歯切れの悪い話し方をした。

休兵衛・陀手朗の二人は懺悔丸を弁護しようとするが、当の懺悔丸にとめられる。

その後奏流丸たちと合流できた四人は中堅陰陽師達にこっ酷く怒られ、なんとか無事に「嗣乃村妖怪戦線」は終わりを告げるのだった。

しかし、この戦線の重要性は平等丸の能力開花だけでは終わらなかった。

なぜならば、ある一人の忍びが今回の戦闘を見ていたからだ。

勿論『新大和改革党』が動き出したという情報は第六次『国家転覆戦争』の発動を危惧されるため、『新大和改革党』は普通ならば今回の一件を見ていたものがいれば里に入る前に抹殺するのが当たり前だ。

しかし彼は無事生き延び、今回のことを本部に伝えられた。それは彼の特殊な『忍術』に起因しているものと思われる。

彼はおんさつがしらじゅうさんれんたい隠殺頭拾参連隊に最近になって数えられた（元々忍軍は少ないのでそんな中から選ばれたということははっきりいって大した事ではないのだが……）こんじしぐん昆獅子軍所属蜻蛉とんぼという男だった。

彼は諜報を主に生業としている忍びで、こんじしぐん昆獅子軍の中でも力量的には大した事のない忍者なのだが、彼は類まれなる空遁の術という最近開発された空中移動術が使える忍者だった。

彼の情報から『新大和改革党』も含め今まで重要視されていなかったこんじしぐん昆獅子忍軍も本格的に物語の中枢に入り込むのである。

彼らの活躍は別の『虚史』で語るとして、話は嗣乃組本部へと移り、嗣乃村妖怪戦線はついに終わりを迎える。

今はようやく奏流丸が平等丸達の暴走を事細かく本部の関係者に報告し終わった所である。

「ふー」奏流丸はため息を付く。「之から先少なくとも10回はここで話したことを説明しなくてはならないだろうな」と小声で呟く。

「しかし、平等丸に友達が出来てよかったじゃねえか」

「しかもそれが懺悔丸でしょ？あのガキ大将の」

「これで仲間はズレにされることはありませんね」

奏流丸と一緒に移動していた仲間たちがのん気そうに話している。

「おまえら……緊張感なさ過ぎだ……」と呆れながら奏流丸が論ずる。

「いや、まあ確かに敵の陰陽師が何処から来たかは分かりませんが……すぐにでも分かるでしょ？」

「そうですよ」

「うんうん」

仲間の陰陽師たちはそんなのん気なことを言っていた。

彼らは未だに『新大和改革党』が復活している事に気づいていな

いのだ。勿論猊戦丸が喋らないからなのだが、緊張感がもう少し彼らにあれば、気づけたはずの事態であった。

彼ら『嗣乃組』はこの国の忍者や侍そして各国に散らばる大名達全員に平和ボケした陰陽師集団として、覚えられているような、緊張感のない陰陽の一角であった。

これはおそらく、彼らを引っ張っていく『頭領』がまだ居ないことが原因なのだろう。

そしてこの年の大晦日に彼らは、平等丸を最年少の頭領にするこ
とで、その日に起こった、大規模な事件の対策をとることになるの
だった。

平等丸・懺悔丸・陀手朗・休兵衛達が死線を繰り広げた翌日から
彼らは四人で行動することになり、組の若い連中からも平等丸の次
期頭首に推薦する人が増えてくる。今まで孤独だった彼はこうして
仲間たちと共に友情を育んでいくのだった。『ある事件』が発生す
るまでは……。

しかし、その『ある事件』はまだまだ先のこと。その日は晴天で
平等丸のこれからの日々を、明るい日輪が明るく照らしていた。

『阿乃村妖怪戦線』 日輪（後書き）

いかがでしたか？

？なに戦闘シーンがグダグダだった？

うーんそこは見逃しといってくれ。

感想を送るかか評価の星を付けるかどっちでも良いんで気が向いたらして下さい。

『万刀流殺戮事件』

虚偽への思想

【1】 序幕

時代は戦争が時代のないものの治安が決しているとはいえない時代の日本。

そのころはまだ、忍術やら陰陽術やらの技術がまだ残っていた。そんな奇妙な時代において珍妙な事柄が罵玖都に起こっていた。

まず、気温が一気に下がりそして各地から有力大名や陰陽師や侍果ては忍者までが集まっている。

そしてそんな異常事態に呼応するように不揃いな二人組みが今罵玖都に向かおうとしていた。

「ううーさぶいーなんで罵玖都ってところは八月の下旬だったのにこんな寒いんだ？」そんなことを震えながら言い、「ほんとに寒い。罵玖都に近づくほどにどんどん寒くなってくる」と薄着の侍の子供は一緒に旅をしている者に尋ねている。

返事がないようだが、いつも通りのようで気にしている様子はない。

一拍おいて、そのもう一人は「知らん」と冷たくあしらう。

しかしどうもちぐはぐな二人組みである。

しかもそれは「会話」だけではなく「様子」である。

先ほど侍と記した子供も日本刀を腰にさしているだけのやんちゃ坊主という感じだ。

それに比べもう一人は「物静かでありおしとやかな人間」という感じであり似合っていない。しかも服装はやはり薄着ではあるが、かなり上質な素材で出来ている。一目でどこかの金持ちという雰囲気伝わる。

そんな人間がこんなやんちゃ坊主とたった二人きりでいるという様子はそれだけで妙な気がする。しかしそれだけではあきたらず、

侍はわけの分らないことを話している。

「なあなあ？ せ：じゃなかった。えーっと何だったっけ、忠治さん？ なんでこんなに寒いんですか？ 駄紹くろって言ったらアカンのか。ん、箔陀はくたさん？ が全然返事してくれないんですよー」

侍がダルそうに言う。しかし明らかに隣に居る人間ではなく、どこに居るかは分からないがどこかにいる人間に向かって言っている。

「おい。禁止していることを言いすぎだ。今度は自分のことを『竜崎りゅうさき 重森しげもり』だということをばらすんじゃないだろうな？ お前の名前は守孝もりたかですよ」

「それにアイツは先に町を調べに言ったからいないですよ。言っただけですけどね」

そう、このように最も不思議なのは周りに二人しかいないことが分かっているのに第三者に向かって侍が喋っていることが大したことでないようにもう一人が過ごしている点だ。

実はこの侍は夢見がちな人間……という事ではなく、彼ら二人には一人の忍び「蟬せみ」という仲間が居るのだった。

「つつうかあの人遅いっすねえ、もうそろそろ下見も終わった頃でしょうに」

もう一人は何も言わない。今度は無視していたのではなく、彼もそう思っていたのだ。

(どうも嫌な気がする。杞憂に終わったくれればいいのだが……) と彼は思いを巡らす。

そして侍は先ほど出てきたように竜崎 重森。彼は竜崎 重松の弟彼には頭首としての仕事は来なかったのだが、6月に起きた大名の殺人事件に巻き込まれ死んでしまったため、今回のような大きな事件に繋がったのであった。

最後にもう一人は大名である「駄紹崎くろさき 瑠鵬りゅうほう」である。彼はある事情によって遠征をしているのであった。

そんな事していると「すたっ」という音と共に農民のような服装をした男が出てきた。

「よう。忠治さんやっぱり調べる必要なんか無かったでしょ？ 罵玖都ってかなりでかい都ですし星七剣衆せいななけんしゅうの一角『万刀流ばんとうりゅう 心剣術』の本家まであるんすから治安もいいですしね」

重森は楽しそうに言う。

「お前を選ぶと言った時お前の家のものが皆『辞めておいた方がいい』と言っていたのだが、お前は本当に大名の護衛をしているつもりがあるのか？」

「え？どこに大名の娘さんが居るんですか？今のあなたは私の兄弟子とか云う設定でしたよね？」

「都合がいい時だけ……」

そんな風に二人は会話をしていた。

しかし今回の主人公はまだ彼らではないのだ。

彼らはある目的のため各地に飛び回り仲間を集める旅をしていたのであった。そのためにこの国でも指折りの大都市である罵玖都に来たのであった。

しかし、その予定は初っ端から「後れを取る」という形で失敗するのであった。

そう。彼らは後に知ることになるのだが、罵玖都で仲間にする予定であった、『万刀流心剣術ばんとうりゅう』の刀塚かたなづかは彼らが来る前夜に党首一人を残して滅ぼされていたのだから……。

【2】 会合

「で、今回の非常事態に対応するために対策本部が『嗣乃組』の本家に設置された訳ですが、今回の事件はどんな大物が絡んでいる

んでしようねえ？」真治は町の大名に今回の事件の応援に送られた仲間の隆一に嗣乃組本家の門前で手続きを受けている最中陽気に尋ねる。

しかし、隆一は「黙れ」と注意を促すように小声で答えるだけで全く仲間と態度が違う。

真治が不満そうな顔をしているので「今回の会合は事が事だけに来る者が色んなところからお偉いさんが来ている」と説明をし始める。

「あいつらは基本的に他人を馬鹿にすることを生きがいにしていく節がある」

「？別に馬鹿にされるくらいいいじゃないですか。俺なんかしょっちゅう馬鹿にされてっから慣れちゃったぜ」

「ハア」と隆一はため息をつき「あいつらは一度馬鹿にしたやつこのことはずっと馬鹿にする。で、今回来るやつらに馬鹿にされると今後の活動に支障が来る」

「あー。ほんで一緒にいる俺が馬鹿にされたらあんたも馬鹿にされると。ほんでこんな所で騒いで欲しくはない」と言い「ん？」と真治は首を傾げる。

「どうした？」隆一が尋ねる。

「いや、別に」と言い、（「結局自分の保身のことしか考えてないのかい」とは言わんほうが良いな）などと考えながら門をくぐる。

確かに会合には各国大名やら隠殺頭拾参連隊（おんさつがしらじゅうさんれんたい）や星七剣衆（せいしなけんしゅう）などのトップの面が並んでいる。と言っても隠殺頭拾参連隊の席に座っているのは只の替え玉なんだろうが。

隆一たちが席についてからしばらくすると、今回の議長役の奏流丸とかいうふざけた名前の陰陽師が出てきた。

「8割の出席者が確認されましたので、これより会合は始めます」と議長が言う。だが、全員集まっていないことに対して、文句を他の出席者たちが言う。

「ヴァン！」とデカイ音が鳴る。隆一達が音のした方向を見ると男が自分の前の机を大破させていた。

「議長が始めるつったんだ！一々口答えしてんじゃねえ」机を対はさせた男は有無を言わさない怒鳴り声で言う。そして「そもそもこんな事態は前代未聞だ。今まで通りにやっていいはずがないだろうが」と続ける。

他の者達は何も言わない。もともと、廃れている陰陽師が議長をやっていることに対して不満を持っているだけであって、文句を言っていた者達はみな他のものを待とうとなど考えていないのだ。

なぜならば年に四回だけ集まる会合はいつも大して話すこともなく、会合の召集率は極めて低いのだ。だから8割という、物事を決定する多数決に必要な人数が集まったことだけで奇跡なのだ。

よって、その集まった者達も殆どが物見遊山で集まってきており、今回の事件に関して言えることなど全くないような者達なのだ。

「誰ですか？あのぶち切れた人は？」真治は小声で、前回の会合に出席していた隆一に尋ねる。

「おそらく今回殺された万刀流の党首だろう。聞いた話では、党首が外回りに出ていたときにやられた様で生き残ったのは党首とその取り巻きだけらしいからな」と隆一は推測を立てる。隆一自身万刀流の党首のことはよく知らないのだ。

【3】

議会

話し合いは始まって暫くするまで、各国大名が他人の発言を否定することで自己満足を満たすと言う間拔けな事をしており、話がいっこうにすすんでいなかった。

「隆一殿！いつまで黙っておられるつもりか！こんなことができ

るのは世界広といえども数人にすぎんでしよう」小声で真治は囁く。

「ん。しかしこの中にも今回の事件に関する知識を持っている者が何人かいるはずだが誰もまともな話をしない」

「ということは知っていることがあるにはあるが情報元が簡単に言える物ではないから、最初に関連事情を話さない。ということですね」真治は悟ったように言う。「最初に発言しようものなら出所を尋ねられる。しかし、話がある程度進めば話に信憑性さえあれば情報元はあまり重要とされない」と話を締めくくる。

しかし、隆一は「いや、そういうことではなく」と真治の考えを否定する。

「おそらく奴等は推測だけで話す輩を否定して自分の意見を出すことで目立つことを考えているんだろう」と蔑む様な目つきで言う。

「ああ、その方が良い世間体を保てますもんね。それじゃあ」と真治は言い、「もう少し発言は控えたほうが良いですね」と喋ろうとするが、すぐに口を紡ぐ。

「それでは僕が話すと言うのはどうでしょう。僕は所詮補佐役と言う形ですし、多少的外れな発言をしても大して突付かれないんじゃないですか？」と真治は妙に冴えたことを言う。

隆一は無言で頷く。

真治は手短に轟忍軍の話をする。

大人数が納得するので、真治はやはりあいつが、つまり氷柱（つらら）が今回の当事者ではないかと考え始めていた。

しかし、当初の予想通り真治達の予測を裏切る情報が続出した。

それは勿論犯人は氷柱ではないという事実を示唆するものであった。

『万刀流殺戮事件』

私欲の眼（前書き）

久々のアップ。

時間が無いので次も大分空きます。

無駄にややこしい設定を入れたので僕が一番今後の展開がよく分かりません。

的な！

『万刀流殺戮事件』

私欲の眼

【1】 水滴

隆一たちが会合に参加している間轟忍軍の『邪柳』組所属の氷柱と神鳴は任務地に向かって移動中である。

空にはいい月が出ている。

月光に負けず他の星も自己主張をしている。

そんな天気の良い夜空に一つの小さな雲が漂っていた。

「ムウ：『万刀流（ぼんとうりゅう）心剣術』の刀塚（かたなづか）がついこの間党首を除いて殺されたらしい。もうそろそろ彼等が動くのですかねえ？」と自分の忍術で作った雲に乗りながら隣に座っている氷柱に鎌鼬（かまいたち）からの連絡を意見を求めながら伝える。

「それは驚きましたね。あそこはまがいなりにも星七剣衆（せいななけんしゅう）の一角に数えられているはずです。と言っても党首さえ生きていければ我々の計画に支障はないですけど」

「それにそんな簡単に殺されるような輩に用は無い。もしかしたら党首もたいした事無いかもな」

とさりととひどいことを言う。彼女にとっては何人死んだとかは殆ど興味のない話題らしい。

「まあ確かに『虐殺が何処で起こった』とか今の我々はこれから『新大和改革党』の拠地の一つを殲滅しに行っているんですから、人がどんだけ死のうが『我関せず』って成るのは分かりますが、少し冷たくないですか？」と言うが氷柱は返事をしない。

「って、寝てるし！」リアクションを取ったため少しバランスを崩しかける。

実に危ない。雲の上なので落ちたらひとたまりもない。

といっても彼らにとつてはその程度のことは毎回の任務のきわざとくらべれば何でも無いことなのだが。

「あー何て言うかなお前の声は聞いていると眠くなるんだよ」悪びれる様子もなく、ポーっとしながら氷柱。しかも「新しい忍法か？」なんて言っている。

「何が悲しくて僕がそんなしょぼい忍法体得しなくっちゃならないんですか？」神鳴はウンザリしている。

「僕達は四つある『轟』の忍者組合から強すぎて逸脱してしまった者達で構成されている、特別編成の『邪柳』っすよ。なのにそんなショボイ忍法：最低習得科目にも入りませんよ」

「最低習得科目？」

氷柱は首を傾げている。どうやら聞いた事のない単語の様だ。それを察したのか、神鳴が反応する。

「あ、氷柱さんは途中から入っているから知らないんですね。我々は6歳までの段階で最低限の『忍法』を体得するんす。その段階で忍法もろくに使えない者は『忍者になる見込みはない』って判断されるんす。で、その忍法が『最低必須科目』って呼ばれてるんすよ」

「あー」と気持ちの籠っていない返事をして「分かった。それで失格になったものは諦めて剣術やらのほかの方面の習練に励むわけだ」と言って立ち上がる。

勿論氷柱が立ったのは知識を深めれたからではなく、目的地が見えてきたからだ。

「仕事ですね。まあ我々二人がいれば相手がどんな反則技を扱う陰陽師集団だろうが関係ありませんよね。氷柱さん」

神鳴が無駄話を切り上げたところには先ほどまで快晴だった夜空が一変して曇天に変わる。それと同時に気温も氷点下を下回り始める。神鳴が自らが呼び出した雨雲に飲み込まれる頃には氷柱の姿は無く、あたり一面に大洪水になる様な雨音と悲鳴が鳴り響いた。

【2】 真実と迷想

同時刻隆一達はというと…

舞台は未だ嗣乃組の大広間でやっている会合の中。

『万刀流心剣術』の刀塚が殲滅させた者がおそらく作り出したであろう多量の氷の影響で室内の気温自体は低いはずだが、参加者はみな汗をかいている。

そう、冷や汗と言う名前の汗を。

その原因として挙げられるのはやはり存在が明らかになった『新大和改革党』の存在であろう。

話は少し前に遡る。そう、真治が『轟忍軍』のことを話した直後まで…。

「まずもって彼らではないと思うよ。いや、彼らを庇うつもりは毛頭ないのだけれどもこのままいくと真犯人が逃げ延びてしまうからね。」星七剣衆の一席に座している侍が誤解を招かれる前に『自分は轟の陣営ではない』という事を念を押しながら言う。

そして反論が来る前に「今の轟忍軍は何かは分からないが、様々な奥地や極地やらに点在しておりまする隠れ里やら魔獣やらの棲家から星七剣衆（せいななけんしゅう）を一つ一つしらみつぶしにしている様だ」

「そして彼らは我々にも勧誘してきた。その事自体は断ったが、それは犯行時刻のすぐ後だ。どう考えても奴らではない」と締めくくる。

一人が口を切ってから、続々と情報が出る。今までの状況では相手が知らない情報をワザワザ流すことは最たる愚行であったが、

逆にこの状況で何も発言できない者達は今回の件の情報を少しも集められない情報機関しか持ち合わせていない能無しだと言うことが露見されてしまう。

いや、もしくは無能を演じている黒幕か……。

しかしなにせよ、黙っている者の多くが、これからの働きを期待できない、今までの流れで来ている者共である事には違いは無い。

「確かに氷柱とか言う忍者も一応は組織の一員としてソレに参加しているようだ」とまた別の権力を保持したがる者が事実確認を深めるために言う。

ここまで来ると「その情報源は何処からだ？」などという質問が出てきそうだが、情報を掴んでいる者達にすれば元の情報の出所は同じはずだし、掴んでない者達にすれば、つまらない事を言って今後の進退にかかわる重要な事柄を入手できなくなっては元も子もないので聞けない……というより、きかないのだった。

しかし、隆一達にとっては腐りきった権力争いには興味が無く、犯人達の情報を欲しているため何も進展があるようには感じられない。

そうしている内に、隆一は（こいつらは何を知っているが、その上でその事に気付かれないように目晦ましをしているのではないか？）と考えるようになる。

「ならば奴等は何のために主力部隊の構成員を投入してまでそんな事をしているのだ？ 噂で聞くところによると、やつ等轟忍軍は歴史上初めて將軍様に【軍】として認定された組織でそれが起因してからか、何処の忍軍よりも構成員の総数は多いはず。それらの行動の目的はなんだ？」そう言った男は鼻息がえらく荒い。大して情報も持たずに参加したため、殆ど喋るきっかけを持てずに困っていたところ漸く話せたのだ。このような会合に参加した意図を思えば当然の事か。

それからは、無能共の無価値で無意味で非生産的な外れな会話というか井戸端会議のようなものが展開される。

「当然軍事力の増強でしょう」

「奴等は戦争を起こす気なんだ」

「馬鹿なやつらだ高々一つの【忍軍】に何が出来る」

そんな短絡的かつ、ある意味彼等が動いている本当の意味を知っているものであれば楽観的にも思える議論が続いた。

そう。勿論轟忍軍はそんな程度のレベルで物事を考え、行動しているわけではないのだ。

しかし、そんな轟忍軍の思考レベルすら想像できない馬鹿がこの会合の大部分を占めているのだ。

そして現状で最も酷い事実は、本会合の参加資格を持っているものが大名に謁見を申し出る事が可能なほどの地位にいる者達なのだ。実際問題そんなお飾りだけの人間で治安を維持している国など、最も戦闘要因が在籍している忍軍である轟忍軍が本気になれば掌握できる。

しかしここで騒いでいる愚者共は戦争の危険性を言い合っている割には理解していないのだから質が悪い。

暫くして頭が痛くなってきた隆一は連れの真治と一緒に外に出る。実は隆一は馬鹿な奴と一緒にいるとよく偏頭痛を起こすのだ。だから相棒の真治と一緒にいるとよく頭が痛くなるという偏頭痛を持っているのだ。

といっても今回の頭痛の原因が判明するのはこれよりずっと後の話なのだが・・・。

【3】 捜査方針

会場の門から漸く出られ久々に気持ちのいい呼吸をしたような感覚で隆一の頭痛はやわらんでいった。

「解けてきましたね」暫くして真治が独り言のように言う

「ん？」

「氷ですよ」

「ああ、そうだな」暫く沈黙が続く。

「やはりアイツではない。アイツの氷は一週間以上氷結し続けるからな。真治、お前は今の会合でどう思った？何を感じた」

隆一は何かを見通したような透き通った目で真治に尋ねる。

「そうですね・・・やはり最初から分かっていた事ですが、会合のかたがたの殆どは無能の集まり。残りの一部にも今回の捜査に快く参加してくれる人は居ないという事は確信できました」

「そして、邪柳組は別の件で活動していた。こちらは後々面倒になる可能性があるので、むしろそちらの調査を進めるほうが今後の活動には効果が得られる。と考えます」

ここまで隆一は何も言っていない。真治としては今まで自分が言ったことは的外れは外していないものの、隆一の考えの想定内ではないような気がしてならない。

「とりあえず僕はそちらを調べる事にします。まあ・・・大分近いのに今回の事件について大して発言しなかった『嗣乃組』のことも気になりますかねえ・・・優先順位では『邪柳組』でしょう」

真治はずっと黙っている隆一の一举一同に注意する。

（恐らく自分の発言をある程度参考にして今後の操作方法を練っているであろう）と真治は思案する。

そして、（何処から攻めるつもりだ、何処の秘境から調査や聞き込みやらを始めるつもりなんだ？まあ何処を指定しても俺ならどんなつらいところでも調べてみせる）などといった事をと真治は拳を握り締めながら決意する。

だが、隆一の口を衝いて出てきた言葉は真治の決意を無に帰してしまう驚きの発言であった。

その発言から、始まった捜査で隆一は『新大和改革党』の存在と全貌の一部部分から明らかにしていくのであった。

彼等が早々に見切りをつけた会合内では不穏な空気が流れていた。
ついに奴らが動き出す・・・・・・

『万刀流殺戮事件』

私欲の眼（後書き）

ん？誤字脱字が在る？

そりゃそうだ。確認なんてしてないからね。何日にもかけて作ってるから確認する気にならないんだよ。

あー一日で書き終わるようになりたい。

『万刀流殺戮事件』

潜入調査（前書き）

月末やけど漸くアップできた。

「万刀流殺戮事件」

潜入調査

【0】 ある門番の愚痴

今俺の目の前には死人のような雰囲気をこれでもかというくらい
かもし出している人間がいる。

何か前に嫌な事があったのか、本当に死んだ魚のような目をして
いる。

その男はどっかの大名が特別に選んだ侍で本職はなんやら捜査を
本職としているらしい。なんでも先日の方刀流の事件で聞き込みを
しているらしい。

はつきり言って門番らしい仕事をしていないので、対応が面倒だ。
一応奏流丸の許可証を持っているので、予約の無い客人とはいえ
門番の自分としては入れなくてはならないのだろう。

といってもこの男が我々を疑っているのは明白である。
全く面倒だこの真治とか言う侍は・・・。

【1】 新天地への困惑

嗣乃組はその存在を隠すために、別の何か特殊な武装集団のよう
なモノだ。と一般の人間には勘違いさせている。

そのためかなりの秘密主義の集団である事はごく一部の人間のみ
が知る話だ。

真治自身もある程度は覚悟していたが、その覚悟程度では少な
かった事に真治はウンザリする事になるのであった。

そもそも彼らは今となっては極少なくなってしまったものの、様
々な職種の間が使っている【異能】の原点である陰陽術者集団の
数少ない一角である。

そのため、もともと隠れる必要など当初は無かったのだが、そん

な彼らも今や片手どころか嗣乃組を含め三家しか残っていない。
よって、・・・である。

「まったくなんなんだあいつは？ 散々俺の事を上から下にジロジロ見やがって。まったく・・・失礼な奴だ。嫌そうに対応してなかなか入れて貰えなかった。」

許可証を見せてもらえないのかと思っちゃったぜ。と真治は誰にも聞かれないように独り言を呟いた。

後ろ向きな真治は（全く：隆一殿のせいでこんな所に行かされる事になるとは：怨むぜ：）と負のオーラを出しながら想う。

真治がこんな風に隆一を怨むのはなにも仲間外れにされたからだではない。

なんと隆一は真治が連れてきた捜査官を全員連れて行ってしまったのだ。

真治にとっては『連行されてしまった』という気がしてならない。が、真治は「いや、こいつらは俺と一緒に嗣乃組を調べなきゃならので・・・無理です。なっ？」と言った。

そして彼の部下は「上司の命令は聞かなきゃですね」と言い、真治が頷く。そして真治が彼らを連れて行こうとすると。

彼らは隆一の方になぜか近寄り、「真治様には申し訳ありませんが、直属の上司よりも一番上の御方の命が優先されますから」なんて真治に言うのだった。

部下は自らの意思で真治から離れた。

手柄を立ててなんぼの世界。つまり真治は部下に見限られてしまったのだった。まあ手柄が立てれない仕事よりも立てれる仕事を選ぶというのは、至極当然の事である。

よって真治は精神的にガタガタの状態。それに加え暑さやら人間関係やらで……。

（ここはなんて活動しにくいんだ。ここの人間は恐らく捜査には

非協力的だと思うぜ。この流れだと。」真治はそんな風にを心の中でぼやく。

暫くだるそうに歩いていると「もしやあなた様は客人の現場事情調査課総監督であらせられる真治殿ではござらんか？」なんてうしらからこえをかけられたのでそちらを向く。

化け物のような男だった。

それは……つまり——ゴツツイ厚着だったのだ。

（なんとこんなに暑いのにかなりの厚着をしているのだ！）と俺は驚嘆する

先日は兎に角大量の氷の塊で驚くほど寒かったが今日は通常通りうだるような暑さだ。

だというのに。

（俺なんてかなりの薄着なのに暑すぎてこんなに苛々してるんだぜ）

そんな吃驚妖怪野郎が笑いながら話しかけてきた。

勿論普通によく見ればある程度は汗もかいている。それに服には様々な刺繍があり、服によって階級のようなものを指し示すようにしているんだろう。

素人の真治でもよく考えれば分かる事だった。

（成る程こいつはある程度重役で俺が何故此処にいるのか知っているはずだ）と考えた真治は一安心して経緯を話す。

真治が話し終わると「話は良く分かりました。ではこんな所であろうろしておらずにどうぞ本堂にお入りください」とにこやかに言われる。

そこでまた真治は（『今回の事件でこの陰陽一家がある程度の疑いをかけている男』に作り笑いまでしている。恐ろしい男だ。）などと敏感に反応する。

俺に言わせれば妖怪なんてわけも分からない……というより、実際にはいないとされているそんな奴よりもソレを退治するのを生業と

していると言われている陰陽術者のこいつの方がよっぽど妖怪だぜ。なんてことを思っていたら、返事をしない事で不信感を抱いているようなその妖怪厚着野郎がソワソワしているので、ウム等と言って肯定した。

「おお、よかった私此処でご意見番をやっておりまする弥彦という者であります」

等と自己紹介を始めだすので慌てて俺も自身の自己紹介も済ます。その後とりあえず日陰になる様な大樹の元に入り、党首と話がしたいなどという趣旨の話をすると、次期党首というのしか今はいないなどと言われる。

党首がいない状態で今までやってきたという訳の分からないことに俺はまず驚く。

何でも複数のご意見番が存在し、それらが導き出す結果で物事を決めるようだ。そういう仕組みでやっているらしい。

真治にはよく分からなかったが、そういうことらしい。勿論無能な党首ならいない方がましだということはいさつき分かった事であるのだが……。

兎に角そんな説明を聞けば納得できるような事で驚いた真治はまだまだ甘かった。

しかし、一番真治が甘かったのは他人の文句ばかり考えていた暢気な思考回路だった。

屋敷が真治を見に騒いでいた間一人だけ怪しい行動をしている者がいた。

「真治とかいう無能そうな男が先日的事件でここに疑いをかけて来た事意外は大したことはありません」

「ええ。まあ、恐らく本人は大して疑いを持っていないのか取調べからやる気は感じられませんかね」

「つふ。分かっていますよ計画に支障が出るのであればしっかりと消します」

そんなことを誰もいないにもかかわらずそんな事を…しかし、独り言ではない間の取り方で話していたた。決して喋っているようではなかった。

【2】 潜入経過

朝目覚めると見慣れない天井がそこにあった。

そんな小さなことで心に靄がかかる己の小ささに今更ながら嫌になりながら、真治は前日の事を頭の中で整理する。

といっても一日目に収穫など無かった。それは当たり前で昨日の真治は自分の上司に対する愚痴と新境地での驚きと戸惑いを感じただけだったからだ。

暫くたって寝室から客間へと移る。

（次期党首があんな餓鬼だなんてここはどんだけ人員不足なんだよ）などと考えながら真治は朝食を食べる。

朝食はご飯に味噌汁、漬物数種類に目玉焼き。妖怪の眼球やらそんなゲテモノではなく、そんな内容で一安心して気が抜けた。

その為なのか、うっかりいつもと同じ調子で「醤油取ってください誠二郎君」などと迂闊にも言ってしまう。

真治が訂正する前に「お友達ですか？」と手伝いの女：いや男か……。兎に角中世的な『嗣乃組（きのぐみ）』の者に尋ねられる。

一瞬何について聞かれているのか分からなかったが、誠二郎の事だと気付き友人のことを少し話す。

すべてを聞き終わった後その者は「あの人は良いお友達をお持ちのようですね」等と言い、誠二郎は変な気持ちに成りながらも適当に返事をする。

（まったく、あの変な奴はなんだったんだ？調子が狂うぜ……。）
この時はまだ真治は自分が感じている感覚が今考えている、軽い恋煩いのような物ではないということに気付いてなどいない。

所変わって隆一。

隆一は真治と離れてから護衛の侍（勿論城之崎大名から使わされたもの以外の隆一の捜査員の侍）を何人か連れて轟忍軍の行った土地を巡っている。

一応魔境や秘境のような赴くだけで死んでしまうようなところではなく、聞いた事もないような田舎町を選んで来た。

余りにも田舎過ぎる内陸部のせいか、その地区は担当の大名がない。

よって、大名に収める年貢のよな物もない。しかしそれでは無法地帯で各地で指名手配されている者や落ち武者、大罪を犯した大名（大名クラスになると殆ど金で解決してしまうので、このクラスの犯罪は他の地の大名の暗殺を指令したやら国家級の犯罪となる）その他諸々の犯罪者の温床である。

しかし、というかだからこそ、というべきか他の土地より検問の数が多く、身内（同じ犯罪者）しか入れない。

そしてその検問に立っている者は恐ろしく強く、連絡網は早く一人と戦っていれば直ぐに応援が来て、強行突破では入れない。

そんな訳有りのこの土地に名はなく、ただ独立しているため『陸の孤島』そして『鬼』のような人間の集まりのため『鬼ヶ島』と呼ばれている。

真治から聞いた話では『ならなぜ、潰しに繋らないのか？』と思っただものだ。

が、そんなことは直ぐに考えなくなった。来て分かった事だが、

ここは思ったより周りに山が多く、元々往来には不向きな土地である。

行軍には全く持って不向きだ。そこで大名達是不干渉を選んだ事が分かる。

真治の部下は真治の命令でこのような無法地帯のような場所で何回か調査していたので、勝手が分かっているらしく難なく入る。

なんなくといっても、ワザワザ数人に分かれて別々の検問を潜りはいった。

その検問も一々分かりにくいところにあり、彼らでさえ探すのに時間がかかった。といっても出いれが少ないため、日にちごとに入ったのでそれは問題では無かったのだが……。

今や隆一は、こんな事なら真治にこちらを一任させていればよかった。と考えていた。

隆一が鬼ヶ島に潜入してから数刻してから、

そのころとある飲食店では特別に個室になっている部屋からこの重役達が雑談を交わしている。

といってもこここの重役というのは服装で階級を表したりしていないので、服装はそこいらの農民と同じ服装である。

他の住民と違うのはチラチラ光って見える恐ろしく冷たい眼光のみである。

「おい。もうそろそろ幕府（大名や侍達の総意の事）からの調査団が入ってくる頃だが。来たか？」と一人の男が話してから雑談の内容が変わる。

「ああ、前回の会議では調査団が来る手筈だったな。まあ、侵入者は彼ら（検問をしている門番の事）が切り殺してくれますからねえ……」

「そおうレニあいつらは一々殺した奴を報告だんてしねえがらなあ」こいつはかなり酔っているようでチャンと喋れていない。

「許可証があっても複数人なら迷わず殺せとはちゃんと全ての検問所に言っているはずです。必ず群れば死にますよ」

「そして彼らは必ず群れてくれる。どんな事があっても三人程度ではこない」

「ぐおおおー」

話をしていた二人が音のする方向を見る。

「雄たけびではなく、いびきでしたか」などといい、潰れてしまった彼を介抱するため、話は自然に打ち切りになった。

真治の部下の慎重さによって最初の関門を突破した隆一は無事に調査は出来るのか、そして真治に迫る怪しい者は一体……。

『万刀流殺戮事件』

潜入調査（後書き）

なんも進展しませんでした。次は少しは動くかなあ？
種まいただけやからなあ今回は。面白くなかったら御免ね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8257p/>

虚史

2011年11月14日18時43分発行